

獄中の作ごくちゆう さく
(武市半平太たけちはんぺいた)

花依清香愛 人以仁義榮
幽囚何可恥 只有赤心明

花はなは 清香せいこうに 依よつて 愛あいせられ

人ひとは 仁義じんぎを 以もつて 榮さかゆ

幽囚ゆうしゆう 何なんぞ 恥はず べけんや

只ただ 赤心せきしんの 明あきらかなる 有あり

解説 投獄された一年十か月の間に作られた詩である。囚人として獄中にあっても、人が人たる所以である仁義に悖らぬ以上、少しも恥じることはない、と己の信念を述べている。

語釈 ※花Ⅱ特定の花ではなく、花一般と見てよからう。※清香Ⅱ清らかな香り。※幽囚Ⅱ投獄された人。※赤心Ⅱまごころ。

通釈 花は、その清らかな香りによって人に喜ばれ、人は、仁義によって人のかがやきを増していくものである。いま、私は獄に繋がれてはいるが、少しも恥とは思っていない。なんとなれば、私の行為は、いつわりのない忠義の心だから出たものであることが、はっきりとしているからである。